

創立三十年記念シンポジウム

期 日 : 2013年7月26日(金)
時 間 : 14:00 ~ 19:00
場 所 : テレビアホール

開かれた行動分析学に向けて —シングルケースデザインをめぐって— Toward Open Behavior Analysis: The Debate over Single-Case Experimental Designs

シンポジウム趣旨

日本行動分析学会は発足 30 年を迎えました。これまでの行動分析学を振り返ってみて問われるべき問いのひとつに、行動分析学は果たして開かれた学問領域となってきたかということが挙げられます。行動分析学のさらなる発展のためには、他の心理学領域や心理学以外の学問領域、ひいては社会に対して開かれた学問領域でなくてはなりません。そのために行動分析学の持つ強みをこれまで以上に積極的にアピールしていく必要があるのではないのでしょうか。本記念シンポジウムは、「開かれた行動分析学に向けて」というメッセージのもと、行動分析学の特色のひとつとして掲げられる「シングルケースデザイン」という研究法を軸に、「開かれた行動分析学」であるために何が必要かを会員の皆様とともに考えたいと思います。

司会・趣旨説明：井垣竹晴（流通経済大学）

話題提供：

石井 拓（徳山大学）：「シングルケースデザインの概要」
吉岡昌子（愛知大学）・藤原誉久（上川病院）・乾 明紀（京都光華女子大学）
：「実践場面におけるシングルケースデザインの活用」
山田剛史（岡山大学）：「シングルケースデザインにおける統計分析」
田垣正晋（大阪府立大学）：「シングルケースデザインと質的研究」

指定討論：藤 健一（立命館大学）、吉田寿夫（関西学院大学）

話題提供

石井拓：シングルケースデザインの概要

シングルケースデザインを用いるときの一般的な手順や、反転法、多層ベースライン法、条件交替法などの各手続きについて事例を交えつつ紹介する。しかし、それらを自在に使いこなすためには実験計画法の論理についての理解が欠かせないため、研究の内的妥当性や一般性の観点からもシングルケースデザインの特徴を確認する。特に、実践場面でエビデンスを重視する風潮が高まってきた中でシングル

ケースデザインを用いた研究が果たす役割について考える。つまり、そのデザインによって何が確かめられ、何が確かめられないかについて、群間比較法の1つであるランダム化比較対照実験と比べながら論じる。その上で、シングルケースデザインを用いた研究をエビデンスとしてよりよく活用するために、再現実験やメタ分析を促進するための体制づくりや、群間比較法との併用の可能性について論じる。

吉岡昌子・藤原誉久・乾 明紀：「実践場面におけるシングルケースデザインの活用」

ここでは職種間連携による多層な支援の実現に、シングルケースデザインの活用が期待される分野として、高齢者および障がい者の介護に焦点を当てる。話題提供者の藤原氏は理学療法士として病院で認知症ケアに携わり、場当たりので効果が曖昧になりがちであった行動・心理症状（BPSD）の対応について現場スタッフと連携し、行動アセスメントに基づく対応方法の具体化と介入効果の検証に取り組まれている。乾氏は組織コンサルタントとして訪問介護事業を展開する企業の組織開発に関わり、サービス提供者が主体となって自らの組織の課題を明らかにし、組織改革するプロセスの支援を行動データの活用により検討されている。両氏の実践の報告をもとに、本分野におけるシングルケースデザインの導入の実際とその利点、現場で直面する課題を討議し、今後の示唆を共有したい。

山田剛史：シングルケースデザインにおける統計分析

シングルケースデザインを用いて実施された研究データ（これをシングルケースデータと呼ぶことにする）の分析は、主としてデータをグラフ化し、目視で処遇の効果を確認する、視覚的判断（visual inspection）で行われてきた。一方で、視覚的判断の信頼性の問題から、視覚的判断を補助するもの、あるいはこれに代わるものとして、いくつかの統計的方法が提案されている。シングルケースデータは、1つのケースについて、標的行動の反復測定によって得られるデータである。このようなデータの特徴を考慮した分析方法が提案されている。本シンポジウムでは、推測統計的手法として、ランダムマイゼーション検定と時系列分析を、記述統計的手法として、様々な効果量を、それぞれ紹介する。効果量は、一事例実験のメタ分析でも利用される。それぞれの手法の概要を述べるとともに、R等を用いた具体的な分析手順についても解説する。

田垣正晋：シングルケースデザインと質的研究

筆者は、長年、障害者の語りに関する質的研究や、障害者施策に関する住民会議に関するアクションリサーチをしてきた。このようなバックグラウンドを持つ筆者は、シングルケースデザインが、介入の因果関係を、観察可能な事象の検討に基づいて同定しようとする実験的手法であり、質的研究とは対極にあると感じていた。しかし、実際の研究にあたってみると、これは誤解であり、質的研究と相通じる点がある事に気づき始めた。それは、研究対象者の少なさ（概ね単一事例）、実験的なデザインではあるが、研究者と対象者の相互作用が一定程度あること、介入前から介入後のプロセスの記述、「一般化」可能な理論よりも、局所的な理論を指向していることなどである。観察された事象の数量化は、1つの記述上の表現であり、意味上の合意が必ず含まれると考えれば、質的研究の立場と相通じるところがある。以上の点に注目しながら、シングルケースデザインと質的研究は、互いの共通点を認めたり、相違点に基づいて補完しあったりしたほうが、実践に貢献できることを論じてみたい。

なお、2014年度に創立三十年を記念した学会誌（特集号）を発行する予定です。特集号において、記念シンポジウムの記録論文、三十年を回顧した記録論文等を掲載する予定です。

シンポジウム・特集号委員会委員長：井垣竹晴
委員：井澤信三、石井拓、長谷川芳典、藤健一、眞邊一近、吉岡昌子